

いつもお世話になります。夏から秋への移り目を「行き合いの空」と呼ぶことがあります。「行き合い」とは「出会い」のこと。夏の湧き上がる入道雲と秋のはかなげな罫雲が一緒になった青空は、ゆく季節と訪れる季節が天上で行き合うような光景であり、時の流れをしみじみ感じさせます。いい出会いがありそうですね。

トレンドを斬る!

かつては失恋を癒すためなどネガティブなイメージが強かった女性の一人旅。ところが今、非日常を楽しむ「一人旅女子」が

急増しています。同行者に気兼ねすることなく自由気ままに観光地を巡ったり、趣味や興味のあるアクティビティでテーマを絞ったりと、充実した一人時間を過ごしています。ホテルや旅行会社が提供するお一人様向けプランも大好評。日常の喧騒を忘れて人生を見つめ直し、刺激や出会いを糧に成長できる一人旅は男性にも広がるかもしれませんね。



365日 が楽しくてたまらない! 「商売のヒント」!

今月の商売のヒント:【今日は何をしましたか?】

ある女性フィットネスインストラクターにヨガを習うと、たとえ初心者でも上手にヨガのポーズができていく気になるそうです。体調不良の人が彼女のレッスンを受けると、なぜか「今日は調子がいい」と思えてくるとか。彼女が特別な技能を持っているわけではないようですが、ある面においては一流なのでしょう。

それは、彼女はどんなときも、誰に対しても、マイナスを口にしないということです。相手が愚痴ろうが後ろ向きなことばかり言おうが、彼女は必ずプラスの言葉を返すのだそうです。かといって、「大丈夫!」「あなたならできます!」と単に発破をかけるだけのポジティブシンキングではないようです。

「なかなか上達しない」と嘆くと、「同年代の方に比べたらよく体が動いていますよ」と励ましが返ってきます。「今日は調子が出ないな」とふて腐れ気味の人に対しては、少しでもできているところを最大限にクローズアップして「今日も収穫がありましたね」と声かけします。こうしてプラスの言葉をシャワーのように浴びているとだんだんその気になってくるもので、彼女のレッスンを受けた人は「自分はまだまだいける!」

とエネルギーが湧き上がってくるそうです。人をその気にさせることにおいて、彼女は一流の指導者と言えるのではないかと思います。彼女のように「自分はいける!」と思わせてくれる人が周りにいる経営者は幸せ者です。しかし、社員をほめることはあっても自分がほめられる機会が少ないのが経営者です。だから経営者は、自分で自分をその気にさせ続けていく努力や工夫が必要なかもしれません。



毎晩、寝る前に次の言葉を自分に問いかけてみてください。「今日は何をしましたか?」。本を読んだ、講演を聴いた、人に会った、なんでもかまいません。何も思い浮かばない日は、とにかく「今日も良くやった」と自分で自分をねぎらいましょう。自分をその気にさせる一流の指導者は、自分自身にほかなりません。



今さら聞けない 経済用語

【今月の教えてキーワード：GNI（国民総所得）】

日本企業や国民が国内外で稼いだ所得の合計のこと。平成24年度の日本のGNIは約490兆円、国民1人当たりでは約384万円だった。先ごろ政府が発表した日本経済再生に向けての成長戦略では、国民1人当たりのGNIを10年後までに150万円以上増やす目標が盛り込まれた。経済指標としてよく用いられるGDP（国内総生産）は国内のみで生み出した付加価値の合計を言い、GDPに海外で得た所得を加えるとGNIとなる。

今を生きる 先人の言葉

欲がない人間、
好奇心のない人
間に用はない

ソニー創業者の一人である盛田昭夫の言葉。欲と好奇心を抱いて目標を達成した者は自信を持つ。自信を持った者は、さらに高い目標を目指して成功へと邁進する。

偉大なる日本の100人に学ぶ 人の心を魅了する生き方。

【独自の美を追求した茶聖：千利休】

現在も多くの人々がたしなむ茶道は、鎌倉時代に栄西が中国から茶を持ち込んだのが起源と言われています。室町時代には武士の間で闘茶が流行、さらに村田珠光が喫茶法を研究し茶の湯が生まれました。珠光が没した翌年の1522年、堺の商家の長男として生まれたのが千利休です。村田珠光の弟子で「わび茶」の源流を作った武野紹鷗の弟子となったのが18歳。安土桃山時代に茶道界で非凡な才能を開花させた千利休は、織田信長や豊臣秀吉の絶大なる信頼を得て政治的な影響力も持っていました。その後、秀吉との関係が悪化し切腹を命じられて世を去りましたが、利休が確立した「わび茶」の世界や数寄屋造り、楽焼といった「利休好み」の美意識は現在も生き続けています。そんな利休は弟子たちに「人と同じことをなぞるな」と説いていました。自身が創意工夫を重ね築き上げた茶の湯が、形骸化してしまうことを利休は危惧していたようです。師を真似るだけではなく新しい試み、自分だけの道を追及する「オリジナリティ」を常に持ち続けることを大切にしていたからこそ、茶道は現在も世界に通じる芸術として生き残っているのかもしれない。時代を越えて愛される「身分の上下に関係なく互いに心を開いて敬い合う」という利休の教え。その思いを感じながら、たまには一服の茶を味わう時間も大切にしたいものです。



現在も多くの人々がたしなむ茶道は、鎌倉時代に栄西が中国から茶を持ち込んだのが起源と言われています。室町時代には武士の間で闘茶が流行、さらに村田珠光が喫茶法を研究し茶の湯が生まれました。珠光が没した翌年の1522年、堺の商家の長男として生まれたのが千利休です。村田珠光の弟子で「わび茶」の源流を作った武野紹鷗の弟子となったのが18歳。安土桃山時代に茶道界で非凡な才能を開花させた千利休は、織田信長や豊臣秀吉の絶大なる信頼を得て政治的な影響力も持っていました。その後、秀吉との関係が悪化し切腹を命じられて世を去りましたが、利休が確立した「わび茶」の世界や数寄屋造り、楽焼といった「利休好み」の美意識は現在も生き続けています。そんな利休は弟子たちに「人と同じことをなぞるな」と説いていました。自身が創意工夫を重ね築き上げた茶の湯が、形骸化してしまうことを利休は危惧していたようです。師を真似るだけではなく新しい試み、自分だけの道を追及する「オリジナリティ」を常に持ち続けることを大切にしていたからこそ、茶道は現在も世界に通じる芸術として生き残っているのかもしれない。時代を越えて愛される「身分の上下に関係なく互いに心を開いて敬い合う」という利休の教え。その思いを感じながら、たまには一服の茶を味わう時間も大切にしたいものです。

トナリの 本棚



【社長は少しバカがいい。】

著者はエステー株式会社の鈴木喬会長。「社長が臆病になったら、大ボラでも吹けばいい」。エステーを「次々とヒット商品を送り出す会社」に変えた鈴木会長の言葉は、経営者に勇気と希望を与えてくれます。

元氣と氣づきを提供する

豊島区池袋の佐藤茂税理士事務所♣♣♣

豊島区池袋2-60-7ルート池袋第3ビル4階

電話：03-3988-8820 FAX：03-3988-8824

<http://www.satousigeru.jp>

mail：info@satousigeru.jp